高良興生院・森田療法関連資料保存会

ニュースレター

あるがまま

No.２０

２０２２年３月１５日発行

《巻頭言》　高良武久先生と下田先生そして森田先生

水野　雅文（東京都立松沢病院院長／日本森田療法学会理事長）

2021年４月から東京都立松沢病院院長を務めている水野雅文と申します。中村敬先生の後任として、日本森田療法学会の理事長を務めております。

森田療法との出会いには、1993年からのイタリア留学中に森田療法について尋ねられても満足に答えられなかった体験、帰国後統合失調症の治療研究を進める中で、発動性の回復に森田療法の臥褥（がじょく）と作業療法が役に立つかもしれないという着想を得たこと、北西憲二先生、中村敬先生が準備されていた第１回森田療法セミナーを知り参加させて頂いたこと、などが幾重にも重なっています。さらには、統合失調症の治療研究の始めに、慈恵医大第３病院の森田療法室長を経て、国立精神保健研究所で社会復帰相談部長をされていた丸山晋先生に御指導頂いたことも忘れられません。森田療法の歴史の中では、第４世代のはしりといったところでしょうか。本誌の巻頭言を書かせて頂けることを大変光栄に存じます。

高良武久先生は九州大学のご卒業で、直ちに精神科教室へ入局されました。その翌年に、下田光造先生が九州大学の教授として着任されたそうです。下田先生は、1921年に松沢病院の医長から筆者の母校である慶應義塾大学精神神経科の初代教授として赴任され、1925年12月に九州帝国大学精神科教授に就任されました。高良先生は森田療法に出合われた経緯を、下田光造先生追悼文集に「下田先生より森田先生へ」と題して書かれています。同書は九州帝国大学精神科の刊行による非売品で、すでに昔の本で、読み返される機会も少ないと思います。本稿では、松沢病院図書室に所蔵されている同書から、高良先生のこの一文をご紹介させていただきます。

それによれば、「（下田先生は）九大に来られて、すぐ集談会での就任演説で森田療法のこと神経質症のことを話され、また神経質症の患者を、昼間外来で精神科の病院内外で作業させたりして森田療法を実施しておられました。そういう事情で私も強く森田療法に関心を持つようになりましたが、これは私自身が若いころいろいろの神経質症状に悩むことが多かったせいでもあります。」と紹介なさっています。

「昭和４年私は下田先生の推輓（すいばん）で東京の根岸病院に医長として赴任することになりました。私が30歳のときです。当時森田先生は慈恵医大の教授ではありましたが、大学には教室というほどのものはなく、もちろん病室も外来もなく、ただ講義されるだけで、臨床講義は根岸病院の患者を用いておられ、その関係もあって根岸病院の医長を兼務され、また自宅で神経質症の患者をあずかって治療しておられました。しかし先生は病弱のため根岸病院の兼任をやめられ、その後に私が就任したわけで、同時に慈恵医大の講師もつとめました。それから私は森田診療所をしばしば訪れ、また根岸病院の集談会で先生の話を聞いたりして直接指導を受けることになったわけであります。私は、下田、森田という得がたい師を持つことができたことを常に感謝しています。」

「昭和12年私は森田先生の後をついで慈恵の教授に就任しましたが翌13年４月３日、京都で開かれた日本医学会総会で宿題報告を「神経質の問題」という題で講演しました。講演の中で、神経質症の素質について森田のヒポコンドリア性の素質があるという説と、下田先生の後天的の環境によるという所論ものべて私の見解も話しましたが、下田先生の環境説には教えられる所が多く、この点アドラーの学説と類似するところが多いと感じました。」と書かれています。

高良先生はこの一文を、下田先生が「森田博士の追憶」の中にのべた末尾の文、「完備した教室に万巻の文献と豊富な研究資料に埋もれている学者たちが、或者は安逸に流れ、或者はその豊富さに災されて散漫となり、かえって一事も完成することなく終るを常とするに反し、何等の研究設備も文献も与えられなかったこの恵まれざる教授の逆境こそ、その資質と相俟って、立派な学説を結成するに至らしめたものであろう。かくて自己の学説を遵奉する門下に囲繞されて逝ったこの真人の最後の幸福は、一の創作も主張もなく、いたずらに西人の所説を祖述するに寧日なき翻訳学者の創造に及ばぬところであろう。」を引いて、「お互いの自戒のかてにしたい」と結んでいます。

フロイトが創始した精神分析が跋扈した時代に、わが国で生まれた森田療法を深く理解した高良先生の、その独自性の継承と発展に向けた堅い決意が偲ばれます。

引用文献
高良武久　下田先生より森田先生へ　下田光造先生追悼文集、6-13 頁。九州大学医学部神経精神医学教室内　編集委員桜井図南男ほか、昭和 54 年 8 月（非売品）

＊＊

事　実　唯　真

―― 怒りのモダリティ（modality）に関する１，２の断章 ――

川上　正憲（東京慈恵会医科大学付属柏病院　講師）

Ⅰ：森田神経質の病態変遷について

森田療法は、創始当初(1919 年)より普遍性を宿した完成度の高いものであった。当時、森田療法が高い治療成績を産出し、森田正馬が絶対的な自信を有していたのは、1 つに森田神経質(発作性神経症、普通神経症、強迫観念症）への正確な indication があったからに他ならない。

森田神経質とは、思想の矛盾と精神交互作用によって構成される、とらわれの精神病理（理想と現実の矛盾に葛藤する精神病理）からなる。昨今、精神科領域における時代推移とともに認められる病態変遷は、当然のこととして論じられている。

例えば、統合失調症の軽症化、うつ病の多様化、発達障害のクローズアップなど。

神経症領域ではどうであろうか。1968 年の西田博文の論文を皮切りに、対人恐怖の中核となる心性が「恥」から「怯え」に変化していることが指摘される。

森田神経質の病態変遷はどうであろうか？小生が精神科医になった 1998 年当時、すでに定型的な森田神経質（葛藤の精神病理）に出会う事は稀なことになっていた。小生は、2006～2013 年、慈恵医大森田療法センター（第三病院）において、入院森田療法の診療に従事した。

当時の病棟で起きていたことは何か？様々な困難に遭遇したが、その 1 つに、病棟の治療構造を揺るがしかねない患者の示す「怒り」の感情があった。

かつては、定型的森田神経質が示す古き良き規範意識（かくあるべし）が作用し、病棟の構造規範は様々な意見がありながらもバランスがとられていた。かつては、むしろ、この過度な規範意識を現実的なラインへと緩めることが 1 つの治療目標であった。

しかし、違うのである。公然と治療者を批判し、治療構造、ひいては治療法に対して「怒り」を向けて来るのであった。小生は、こうした現象を現代の森田神経質の一亜型として拙論にまとめた(精神療法 38(2):216-224,2012 および、精神神経誌 120(11):997-1004,2018)。すなわち、価値の相対化による「かくあるべき理想像（精神的支柱)」の拡

散と、心的外傷性（易傷性:vulnerability）の生活史による「傷ついた自己（基本的な安全保障感の障害、同一性の意識の障害）」の精神病理学的布置である。

この精神病理学的布置は「思想の矛盾の弱力化」をもたらす。思想の矛盾の弱力化は、葛藤水準の減弱化を意味し、怒りの感情の噴出（易怒性）を導く。

当然、治療的接近も、①従来の不問技法に象徴される父性原理（切断すること）に基づく治療技法のみならず、「包み込むこと」に象徴される母性原理を最大限に発揮した入院森田療法の治療構造、治療技法が有用、②治療構造を象徴とする規範の内面化による精神的支柱の再構成、③純な心の邂逅現象（つながりが再生される体験）が重要となることを論じた。

Ⅱ：森田正馬の「怒り」の感情のゆくえ

森田正馬が幼少期より神経症症状に悩まされたのは周知の通りであるが、この神経症の歴史は、同時に父親との葛藤（怒り）の歴史であった。

森田は、常に学資を制限する父親に反抗して、18歳（1891 年）のときに家出を試みる。しかし、失敗に終わる。さらには、22 歳（1895 年）時に、身体虚弱であることを理由に高等教育を受けることを許さない父親には内密に、奨学金獲得へと動く。

そして、父親の学資の送金が遅れたことが、その発端として語られることの多い「必死必生の体験（1899 年）」。

いずれも森田の行く手を阻む対象として現れる父親。森田は、その父親との闘い、葛藤を必死にもがき、終には、精神科医、それも当時、恩師、呉秀三も良い顔色をしなかったという精神療法家のパイオニアとして独自の identity を獲得する。

そうした、独自の identity を獲得し、運命を切り開くのと反比例するように、森田の神経症症状は少しずつ改善し、消失したのであった。これは、精神分析的視点から見ると、他ならぬエディプスコンプレックス（Oedipus complex: Sigmund Freud）の解消による、神経症症状の消失である。

その後、森田は、34 歳（1907 年）のときに、初めて手にした 100 円札を父親へと送金する。父親との闘いは、父親への怒りの感情から、感謝へと変化している。

森田は、しっかりと、父親と向き合い、自らの運命に抗い、必死に自分なりに切り開いた結果、現代の親鸞とまで呼ばれ、神経質治療に情熱と愛を注ぐ厳父（不問技法に代表される）となった。

同時期に（34 歳）、森田は、呉秀三より千葉医専教授（高等官六等）を打診されるが、煩悶のすえ、慈恵医専教授、根岸病院顧問の道（生き方）を選択する。立身出世主義の時代にあって、立身出世を第一とせずに、精神療法の実践・研究を十全に全う出来る環境を選択した。

この決断の本質は、生の欲望の機能によって触媒された近代的自我の覚醒であると同時に、現代哲学のキーコンセプトとされる自由意志（free will）にある。

森田は言う「森田の学説は、これを打破して前進することが森田の精神である。今後細部の研究が待ち構えている。僕の説を鉄則として固執してはならぬ」（井上常七：森田正馬評伝 月報 1974 年）。後世の森田療法家の一人として、厳父森田正馬と正面から向き合い、自ら、その答えを真摯に出すことを求められていると認識する。

＊＊

お　知　ら　せ

1　訃報

高良武久先生の次女、高良留美子さんが昨年 12 月 12 日、膵臓がんのため 88 歳でご逝去されました。生前、保存会には沢山のお力添えをいただきました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

2　阿部亨先生、丸山晋先生の動画を You Tube で初公開！

会員の皆様には、２月に文書でお知らせしましたが、あらためてお知らせします。とくに、両先生のインタビューについては、高良興生院で長年にわたって「入院森田療法」を実践して来られただけに、大変貴重な内容になっておりますので、ぜひ、ご覧いただきたいと思います。

① 講演「**高良興生院を次世代に語り継ぐ**」・・・(36 分)　　講師：阿部亨先生

② 講演「**私にとっての高良興生院**」・・・・・・(1 時間 20 分)　講師；丸山晋先生

③ **阿部先生インタビュー**・・・・・・・・・・・・・・聞き手＝市川光洋先生

第一章「**生い立ちから大学卒業の頃まで**」・・・(30 分)

第二章「**高良興生院・昭和 30 年代**」・・・・・(27 分)

第三章「**高良興生院・昭和 40 年代以降**」・・・(34 分)

第四章「**印象深い思い出**」・・・・・・・・・・・(28 分)

第五章「**森田療法について思うこと**」・・・・・(30 分)

④ **丸山先生インタビュー**・・・・・(1 時間 53 分)・・・聞き手＝市川光洋先生

※講演について

保存会ホームページのトップページ「講演情報」からご覧いただけます。また YouTube からも「高良興生院・森田療法関連資料保存会チャンネル」で検索いただきますとご視聴いただけます。

※インタビューについて（会員限定）

ホームページのトップページから上方の「講演情報」をクリックし、「保護中：【会員限定公開】【YouTube 限定公開】会員限定公開インタビュー　阿部亨先生、丸山晋先生」をクリックすると、パスワードの入力画面が表示されますので、半角英字で arugamama とご入力いただきますと視聴ページが開きます。

3　ニュースレター『あるがまま』のバックナンバーを保存会ホームページ掲載

前回のニュースレターでもお知らせしましたが、あらためてお知らせします。
ニュースレターには、現在まで、高良興生院に関わられた多くの先生方の寄稿もございます。ぜひ一読ください。前身の「高良武久・森田療法関連資料保存会」のニュースレターも、あわせて掲載いたしました。
閲覧には下記のリンクから、パスワード；shimoochiai　をご入力の上、ご閲覧ください。
http://www.hozonkai.net/news/nlbacknumber/（高良保存会で検索し、トップページ「お知らせ」から）

4　寄贈本

高良留美子さんのご遺族から寄贈されました。

① 『見出された縄文の母系制と月の文化』　高良留美子著　2021 年発行

② 『千年紀文学』（高良留美子さんの追悼文集）

岡本重慶先生から寄贈されました。

① 『あしかび全集』第一巻～第五巻　　和田重正著　1977 年発行

② 『百年の蕋音（あしおと）』（上）（下）　　高良留美子著　2004 年発行

■編集／発行　高良興生院・森田療法関連資料保存会
◇連絡先　〒161-0032　東京都新宿区中落合 1－6－21　就労センター「街」内
☎03－3952－9975　ただし、火、水、木、金、土曜日の 10 時から 16 時まで。
◇電子メール　info@hozonkai.net　◇ホームページ　http://www.hozonkai.net/